

第67次千葉県教育研究集会

第1分科会 国語教育（文学教育）

広く深く豊かな文学教育をめざして

～子どもたちと作品のおもしろさを見つけていく文学の授業の実践（1・2年生）～

1 設定理由

今の子どもたちと同じような、刺激の多い環境で育った私にとって、学校の文学の授業は人の気持ちを考える貴重な機会だった。心が耕され、癒やされていたように思う。

文学作品には、人の行動の細かな変化や、微妙な気持ちの移り変わりが描かれている。文章表現や構成にも意味がある。そのような、文学作品のおもしろさを見つけていくことを通して、子ども達の心を豊かにしていきたい。また、経験の浅い教師なりに文学の授業で挑戦したことを、同世代の教師に伝えていきたいと考え、主題を設定した。

2 研究の内容

◎子どもたちと作品のおもしろさを見つけていく授業を目指す。

①音読の回数や方法にこだわり、おもしろさの発見や内容理解につなげる。（1・2年）

音読の上達は、内容理解を深めると考えた。1回でも多く作品を読ませることや、読み方にこだわり、おもしろさの発見にもつなげていく。

②発見したことや、思ったことを話す楽しさを味わう。（1・2年）

子どもたちの発見や思いを教師がしっかりと聞き取り、安心感を与えることが、発表する力につながる。発言を受け入れる教員の姿勢を大切にしていく。

③自分の考えの根拠を明らかにする。（2年）

物語の内容だけでなく、文章の表現に着目できるようにするため、文に線を引くという作業を取り入れる。自分の考えの根拠を、文章中から示し、より深い読み取りにつなげる。

3 結論

◎子どもたちと作品のおもしろさを見つけていく授業を実践することができた。

① 音読に力を入れた結果、読むことへの意欲や読む体力がついた。内容が理解できると読み方が変わっていった。役割読み等を通して、様々な友だちの読み（読解）を聞いたことも刺激になり、文章の表現のおもしろさにも気付くことができた。

② 発見したことや、思ったことを話す楽しさを味わった結果、子どもたちが活発に発言をして、語り合う姿が見られた。また、読み聞かせの後の感想の交流を大切にしたことにより、意見を言えなかった子も、抵抗なく自分の意見を言うことができるようになった。

③ 自分の考えの根拠を明らかにするために、文に線を引く手立てをとったところ、「～と書いてあるから、・・・だと思います。」と発表する子どもが増えた。また、登場人物の気持ちを考える場面でも、文章表現に着目して答えを導き出していた。

安房支部

南房総市立三芳小学校

山本 香織

広く深く豊かな文学教育をめざして

～子どもたちと作品のおもしろさを見つけていく文学の授業の実践（1・2年生）～

第1章 私の考える文学教育

1 今の子どもたちと文学教育

正直に言うと私は昔から本を多く読まない。携帯やゲームなど、本より興味を引かれるものがたくさんあり、今の子どもたち同様、刺激の多い環境で育った。しかし、学校での読み聞かせや、みんなで話し合う文学の授業は好きだった。先生や友だちと一緒に勉強していくと、作品のおもしろさに気づく。人の気持ちを深く考え、いろいろな感情を知ること、時間はかかるが楽しかった。今考えると、心が耕され、癒やされていたように思う。

そのような経験から、今の子どもたちにとっても、学校の文学の授業は大切な機会だと考えている。文学作品には、人の行動の変化や気持ちの移り変わりが書かれている。文章表現や構成にも意味がある。そのような、文学作品のおもしろさを見つけていくことを通して、子どもたちの心を豊かにしていきたい。

そのためには、子どもたちが何度も作品を読むこと、しっかりと作品の内容理解をすることが必要である。この実践では、音読の回数や方法にこだわり、おもしろさの発見や、内容理解につなげたいと考えた。また、発見したことや、思ったことを話す楽しさを味わうために、発言を受け入れる教員の姿勢を大切にしたい。経験の浅い教員なりに、この文学の授業で挑戦したことを、同世代の教員に伝えていきたい。

文学教育のめざすもの

文学教育を実践するにあたり、子どもたちの何を育てていかななくてはならないのかを確認した。文学教育のめざすものは、主に以下の5つが考えられる。

○人や社会を見る目を育てる。(感性的人間認識)

- ・人や社会を多面的に見る目
- ・人を思いやる心

○豊かな感情を育てる。

- ・喜怒哀楽を感じる力

○文学作品（絵本）を内容と表現の両面から捉え、そのねうちを多面的にとらえることができるようになる。

○ことば・文章への感覚が育つとともに、語彙を増やす。

○読み聞かせや授業を通して、読書への関心や意欲を高める。

第2章 1年目の挑戦

1 1年生の子どもたち(女子12名、男子8名 計20名)

自然豊かな地域にある南房総市立三芳小学校は全校児童233人の学校で、素直で優しい子どもが多い。1年2組の20名の子どもたちは、元気で人懐っこく、思ったことを口々によく話した。一方、人前で話をする場面では、緊張して泣いてしまったり、声が小さくなってしまったりする子が少なかった。

子どもたちは、教員歴1年目の私と共に、伸び伸びと楽しい学校生活を送った。最初はひらがなの学習から始まり、次第に文が読めるようになり、2学期には物語が読めるようになった。文字が読める喜びを、一緒に味わってきた。1年間で培った力を使って、3学期では、「お手がみ」のおもしろさを見つけていく授業を試みた。

2 授業実践「お手がみ」 作 アーノルド＝ローベル

(1) 作品のおもしろさ

- ① 話の展開が魅力的である。手紙をもらえないがまくんに、かえる君が心をこめて手紙を書く。しかし、かたつむり君に手紙を託したために、なかなか手紙は届かない。結局、かえる君は手紙を書いたことをがま君に話し、二人でいっしょに待ち続ける話である。いろいろとうまくいかない二人は、まるで1年生の子どもたちのようである。二人の友情や、手紙の内容にも感動する。
- ② 時の流れがゆったりしている。手紙が届くまでに3日もかかったこと、その間二人がずっといっしょに待っていたこと等、時の流れがゆったりとしている。逆に、かえる君が必死に手紙を書く場面は、短い文が続いて緊張感がある。
- ③ 二人の会話のテンポがよい。会話を中心に話が進んでいる。二人のやりとりを読んでいくうちに物語に入り込み、がまくんとかえる君の気持ちになりきって音読したくなる作品である。
- ④ 挿絵の微妙な変化がおもしろい。絵本でも教科書でも、子どもたちは挿絵をよく見ている。「お手がみ」の最初から2番目と最後から2番目の挿絵は、似ているようで少し違う。どのように違っているのか、なぜ違うのかを理解するには、物語全体をとらえる必要がある。低学年の子どもたちの内容理解には、挿絵が大きな役割を果たしている。

(2) どのように読ませるか

① 音読に力を入れる。

音読の上達は、内容理解を深めると考え、次のような手立てを講じた。

- ・毎日の宿題に音読を取り入れる(3回)。
- ・授業が始まる前は、音読をして待つ約束をする。
- ・音読の指導の観点を明確にする。

(教科書の持ち方や立ち方、「大きく、ゆっくり、はっきり」という声の出し方)

- ・一人で読む、役割読みをする、グループで音読する等、様々な音読の形態をとる。
- ・音読大会を実施し、隣のクラスの音読を聞く。

② 子どもたちの発見や思いを教員がしっかりと受け止める。

低学年の子ども達にとって、「先生が聞いてくれている」という安心感は、発表する力になると考えた。子ども達の発見や思いを、できる限り肯定的に受け止めたい。

最初に「お手がみ」の読み聞かせをした後は、子ども達に感じたことを自由に発表させたい。その後の授業でも、子ども達の発言を大切にしていって進めていきたい。

この授業の後、アーノルド＝ローベル著の本を市の図書館から50冊借りた。友だち同士で「見て！お手がみの前の話！」と発見を共有している姿や、「この本おもしろいよ、読む？」「もう20冊読んだ！」という会話が聞こえ、2週間ずっと本を読んでいる状態だった。授業を通して、読書への関心や意欲が高まったと言える。

卒業式間際になると、自分たちから進んで6年生に手紙を書き始めた。手がみがもらえない6年生はかわいそうという発想から、担任の先生に代表で読んでほしいとお願いをしに行く子どももいた。修了式間際になると、今度は私に多くの手紙が届いた。

課題

- ・様々な意見が出た方が、読みが広がるという考えから、できれば全員に発表してほしい。どうしても3人の子が、一度も挙手せずに終わってしまった。友だちの話を聞くだけでも勉強になっている、と言えるかもしれないが、もつと手立てがあったはずである。次の実践では、日々の国語の授業や、日常生活の中から、自分の思ったことを言うとりくみをしていきたい。
- ・教材研究が足りなかった。子どもたちの反応を予想したり、作品全体がとらえられるような主発問をしっかり準備したりしていなかった。そのため、子どもたちが何を答えればいいのかかわからない状況があり、時おり授業に閉塞感があった。より深い教材研究と、計画的な授業の組み立てが必要である。

第3章 2年目の挑戦

1 2年生になった子どもたち(女子12名、男子8名 計20名)

クラスを持ち上がり、同じ仲間でもた1年間勉強することになった。相変わらず元気な子どもたちで、「全力」という言葉が気に入って、学級目標に入れた。

前年度の実践以降、本に興味を示す子どもが多くなった。授業が始まる3分前、課題が終わった後、帰りの会が始まるまでの時間など、少しの間に読書をしている。

また、もともと読み聞かせが好きだったが、2年生になってからはより興味をもつようになった。次の読み聞かせで読んでほしい、と本を家から持ってくる子どもや、休み時間に友だちに読み聞かせをしている子どももいる。

そして、1年生の時以上に、意欲的に音読に取り組んでいる。2年生の最初の教材「えいっ」でも、楽しそうに読んでいた。「大きく、ゆっくり、はっきり」は合い言葉になっている。一方で、話の深い部分の読みができる子どもは一部に限られている。「えいっ」では、嘘をつくおとうさんの愛情を理解するのが難しかった。音読は内容理解の一助となっているが、それだけでは深い読みに至らないようだ。文章の表現等に注目させる手立てが必要である。

2年生になり、個性や学力差がより明確に現れはじめた。読みがたどたどしい子が3人、思ったことを発表するのが苦手な子が3人いる。その子どもたちを配慮しつつ、前年度の反省を生かし、今年はより深く作品を読ませたい、という目標で実践をした。そのために、教材研究にも時間をかけた。

(3) 授業のあらまし

1 / 5	ねらい：登場人物を把握する。全員が感想を発表する。
挿絵を黒板に張り、その下に対応する子どもたちの感想を書いた。(資料①) 全部の感想を「そうなんだ」と、教員が受け入れるように心がけた。全員は発表できなかったが、特に最後の場面に感想が集中した。音読を心待ちにしていたようで、授業の終わりには元氣よく音読した。	
2 / 5	ねらい：挿絵の並べ替えで話のあらすじをつかみ、全体をとらえる。
挿絵の並べ替えは大変意欲的に取り組んだ。並べ替えの間違いに気づいた子どもが、「音読を何回もしたからわかる。それは違うよ。」と言ったり、他の子が、「正解がわからないから後で音読をしようよ。」と提案したり、自分たちで課題を解決する姿勢が見られた。	
3 / 5	ねらい：がま君とかえる君の気持ちを考えて音読する。
ベッドで寝ている場面を見て、「がま君はイライラしてる。」という子どもの発言から、本当にそうなのか考え、数人の子どもが音読で表現した。がま君の言った言葉にも注目し、不機嫌な様子をしく表現していた。役割読みに意欲的にとりくみ、もっとやりたいという声が聞こえた。	
4 / 5	ねらい：手紙の内容に着目し、なぜいい手紙か考える。
「しんかいなる」や、「しんゆう」という言葉に着目し、自分の言葉で言いかえていた。特に、「きみのしんゆう」に着目した発言から、いい手紙だと思っていることが共有できた。(資料②) みんなの前で役割読みをしたいという声が出て、グループで発表をした。	
5 / 5	ねらい：がま君とかえる君に思ったことや読み取ったことを手紙に書く。
手紙を書くのが待ち遠しい様子で、まるで自分の友だちのように、がま君たちへ手紙を書いていた。(資料③) 授業最後の音読では、「大きく、ゆっくり、はっきり」を心がけられる子が増えた。	

3 1年目の成果と課題

成果

①音読に力を入れた結果

登場人物の気持ちを考え、なりきって読む子どもが増えた。また、大きな声で元氣よく音読できるようになり、音読に自信をもつようになった。家でも読んでいるはずだが、とにかく飽きずに読みたがった。授業前に役割読みのような遊びをしていたり、本文の暗唱に挑戦したりする姿も見られた。

授業を重ねるにつれ、最初の感想より深く内容を読み取る子どもが出てきた。手紙の内容を考える授業でよく表れていた。人の気持ちを多面的な角度から見ることできていた。

②子どもたちの発言や思いを、教員がしっかりと受け止めた結果

たどたどしい子どもの発言であっても、「そうなんだ」「なるほど」という言葉を返しながら、できる限り聞き取る努力をした。自分の意見を言いたいと、挙手が絶えなかった。友だちの意見に、素敵だなと感じると、自然と拍手をする子どもが増えていった。それをきっかけに、今まで発言しなかった子も、手を挙げる姿が見られた。授業中に思ったことをつぶやく姿も多く見られた。

2 授業実践「きつねのおきやくさま」 作 あまんきみこ

(1) 作品のおもしろさ

- ① きつねの気持ちの変化が魅力的である。食べるつもりだったひよこに、「きつねおにいちちゃん」「やさしいねえ」「親切なの」と言われ、最初は身震いする程違和感を感じていたが、だんだん嬉しくて仕方なくなってくる。最終的には、自分を純粋に慕ってくれたひよこたちを、命をかけて守ってしまう。人にほめられて、その気になって、ほめられたような姿になろうと無意識にがんばってしまうきつねは、まるで2年生の子どもたちのようでかわいらしい。きつねに感情移入して物語を読み進める子どもは多いのではないだろうか。
- ② 文章の表現に注目したい。「それはやさしくたべさせた。」「ひよこはまるまる太ってきたぜ。」など、日常生活であまり使わないけれど、物語をよりおもしろくしている言葉があちこちにある。また、「ぼうっとなった」から「うっとりした」「うっとりして、きぜつしそうになった」と、だんだんと表現が大きくなっているところに気づくと、きつねの気持ちの変化がよくわかる。そして、クライマックスでは、「ゆうきがりんりとわいた。」「たたかったとも、たたかったとも。」「じつに、じつに、いさましかったぜ。」と言葉を何回も重ね、きつねの勇姿を称えている。子どもたちは、早く次の場面を読みたい気持ちと、もしかしたらダメかもしれない、という不安と期待の入り交じった気持ちで、読みながら胸が高鳴るのではないだろうか。
- ③ 「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」の読みのおもしろさがある。おおかみに立ち向かうため、きつねがそう言っるとび出す場面であるが、前後に明瞭な主語がないため、一部の子どもたちは、おおかみが言ったせりふと捉えるのではないだろうか。直後に、「言うなり、きつねはとび出した。」と倒置で主語があるので、きつねが言った言葉と説明がつくが、重要なのは、なぜきつねがわざわざ言っるとび出したのか、ということである。この説明をするには、子どもたちは、最初からページをめくり、きつねの気持ちの変化を読まなければならない。そして、自分の言葉で、きつねの気持ちを代弁しなければならない。この、きつねの一言の謎を解くことが、物語全体の読みを深める行為になるのではないだろうか。
- ④ 「きつねは、はずかしそうにわらってしんだ。」の理由が複雑で、深い読みが必要である。食べるつもりだったのに、ひよこたちを守ってしまった自分がおかしいと思う姿を表現した部分である。きつねはどんな気持ちだったのか、物語全体を理解していないと辿りつけず、友だちの意見を聞いて初めて気づく子どももいるだろう。自分だけの読みではなく、友だちと読み合うことで、文学の授業の楽しさを感じるだろう。
- ⑤ 挿絵のかわいさも魅力の一つである。きつねがひよこをもてなしている部分や、喜んで屈託のない笑顔のひよこを見ていると、「きつねのおきやくさま」という題名の意味が理解できる。また、春夏秋冬と季節が変化していることを考えると、相当な時間もてなしていたことがわかる。「お手がみ」もそうだが、子たちの心を打つ物語は時間が

ゆっくり流れているように感じる。なんでも速さを求められる時代だからこそ、物語は読んでいてほっとする。そんなよさを、子どもたちが体感してくれればいいと思う。

- ⑥ 昔話風に始まり、終わるおもしろさもある。特に、最後の終わりに驚く子どもがいるだろう。だからこそ、悲しい物語ではなく、ちょっとまぬけな、でも素敵なきつねがいたんだよ、という話としてまとまっているように感じられる。

(2) どのように読ませるか

①音読に力を入れる。

- ・内容理解を深めるため、引き続き、1回でも多く作品を読ませたい。「お手がみ」以降、読むことへの自信がついているので、わからないことがあれば読んで確認するという姿勢をつくっていききたい。また、音読で培った基本的な内容理解に、より考えたくなるような、有効な発問をしていくことで、より深い読みへつなげていきたい。

- ・「きつねのおきやくさま」も、会話文のリズムや、独特の言い回しがおもしろいので、身体で音読を楽しんでほしい。様々な形態をとって、自分の読みを表現させたい。

②発見したことや、思ったことを話す楽しさを味わう。

- ・引き続き、子どもたちに、「聞いてくれている」という安心感を与えて、つぶやきや発表ができる雰囲気をつくっていききたい。また、発表できない子どもたちへの手立てとして、日常の中で何でも言ってよい時間をつくろうと考えた。2年生になり、読み聞かせをできるだけ毎日行っている。その中で、週に1回程度、全員の感想を聞く時間を設けたい。読み聞かせは感想を求めないものだが、子どもの負担にならない程度で、「思ったことを何でも言っていい」練習を試みたい。

③自分の考えの根拠を明らかにする。

- ・2年生からの、初めての挑戦である。物語の内容だけでなく、文章の表現に着目できるようにしてほしい。そのために、文に線を引くという作業を試みたい。自分の考えの根拠を、文章中から示せることは、これからの成長で必要になる。音読との相乗効果で、より深い読み取りができるようにしたい。また、線を引いた文を全員で共有したり、視覚的に理解したりするために、「まきもの」の活用をしたい。これは、黒板の横いっぱいにつなげた、細長い教科書の拡大のことである。物語をページで区切らず、ひとまとまりとして捉えることにも有効だと考える。「まきもの」を通して、揺れ動くきつねの気持ちの変化を理解させたい。

(3) 授業のあらまし

第一次	1 / 8	ねらい：話のあらすじをつかみ、感想の交流をすることができる。
	「トントントンをまちましよう」と同じ作者であることを伝えると喜んだ。しかし、読み終わった後は、いつもの拍手がなく、物語にショックを受けている様子だった。ボツボツと「きつねがかわいそう・・・」という意見が出始め、最後の場面で、「悲しいお話」という感想が集中した。「わらってしんだ」のところがかわいという意見もあった。「わらってしんだ」きつねの気持ちを理解している子どもはいなかった。20人中17人が発言し、	

	好きな場面や気になった場面はどこか尋ねると全員挙手することができた。 話のあらすじをつかむため、今回も挿絵を利用した。子ども達が感想を言うと、該当する場面の挿絵を黒板に貼り、その下に感想を書いた、「お手がみ」の時も同様にしていた。この方法を使うと、まだ感想が出ていない場面について子ども達が気づき、何か言おうと考えたり、あらすじを一度では把握できない子どもも、思考が整理されたりして、発言がしやすくなる。 多くの子ども達が、きつねは最初はひよこを食べようとしていたこと、だんだん可愛いと思い、神様みたいにがんばって戦ったことなど、大まかなあらすじを理解していた。他にも、ひよこがだんだん太ってきたことや、ご飯を食べている時の顔がかわいいことなど、挿絵の細かな部分に気づいていた。(資料④)	
第二次	2 / 8 3 / 8	ねらい：役割読みを通して、表現のおもしろさに気づくことができる。
	子どもたちはすでに音読を重ねている状態だったため、役割読みを提案すると喜び、熱心に取り組んだ。「これはきつねの言葉だよ」「ここは『』がないよ」と話し合っ確認している姿が見られた。 気になる言葉や、おもしろいと思う言葉を探し、教科書に線を引く作業に初めて取り組んだ。子どもたちは、教科書を何度も読みながら、意欲的に線を引きつづけていた。押さえておきたかったおもしろい言葉は、ほとんど発表され、この作業と音読の効果に驚いた。(資料⑤) ある子どもから、「まだいるぞ、きつねがいるぞ」は誰が言ったのかという問いが出た。全員に、きつねとおおかみのどちらが言ったのか聞くと、一人だけがきつねだと主張した。「もっと勉強していくと、どちらが言ったかわかるよ。」という声かけをしたところ、「楽しみだな」という反応が返ってきた。この問いのおかげで、7時間目に予定していた授業への意欲が高まった。	
第三次	4 / 8	ねらい：作品の全体をつかむことができる。
	きつねの気持ちの変化を理解するために、作品全体の構造を学習しようと考えた。そのために場面分けの視点(時、登場人物、行間)を確認して、場面分けをすることにした。しかし、子どもたちにとってこの作業は難しかったようである。「どこでわかれるのかわからない」という声が多く聞こえた。このような実態から、改めて、さし絵の有効性とこれからの課題が見えてきた。子どもたちの感想や発見などは断片的なもので、まだ物語をままとりとしてとらえていなかった。この授業をしたことで、次時の手立てを考えるよいきっかけになった。季節や登場人物の関連性については理解できた。	
第四次	5 / 8 6 / 8	ねらい：きつねの気持ちの変化を読むことができる。
	次時の「いや、まだいるぞ、きつねがいるぞ。」と「きつねは、はずかしそうにわらってしんだ。」の部分の読みを深めるために、本時は重要な授業だった。 子ども達は、きつねの気持ちがわかる文にえんぴつで線をひいた。何度も教科書を読んで、「ぼうつとなった」や、「にげる気かな」「こっそりついていった」などに線を引いていた。 作業が終わると、どこに線を引いたかを、理由を含めて発表した。「まきもの」に、きつねがうれしいと感じている文には赤線を、食べたいという気持ちには青線を引いた。なぜ色を変えているのかは言わなかった。すると、子ども達はその違いに気がつき、更に赤線と青線が交互に入り交じっていることを発見した。これにより視覚的にもきつねの揺れ動く気持ちが理解できた。(資料⑥)	
	7 / 8	ねらい：最後の場面のきつねの気持ちを考えることができる。

「いや、まだいるぞ、きつねがいるぞ。」は誰が言ったのかたずねると、ほとんどの子どもが、なぜか、きつねだと答えた。第二次で聞いた時は、きつねだと答えた子どもは一人だけだったので、非常に驚いた。理由を聞いてみると、音読を繰り返すうちに自然に読み取っていったようである。もっとこの部分を読み深めようと試みた。

「いや、まだいるぞ、きつねがいるぞ」は誰がどんな気持ちで言ったのかを考えている場面

担任	子どもたち
・この部分（きつねがたたかう場面）で線を引いた人はいますか。 多くの子どもたちがそこに線を引いていたので、驚いた。 ・ここできつねの気持ちがわかるの？ ・では、どんな気持ちなのかな。 きつねの気持ちを考えることから始めようと考えた。 ・そうだったね。Dさんが言っていたね。 では、きつねが言ったと思う人？ ・こんなに、勉強して意見が変わったんだ。 ・ではDさん、前にきつねだと言っていた理由を教えてください。 他の子は困った顔をしていたので、Dさんから話を聞くことにした。 ・Eさんいいところに気がついたね。どういふことかと言うと、「きつねは、いうなり飛び出した」ってことだよ。 ・でも、なんでそんなこと言ったの？ この理由が言えたら、きつねの気持ちが理解できているはずである。	A：「いや、まだいるぞ、きつねがいるぞ。」に線を引きました。 他：同じです！ B：ああ。引こうと思ったけど、やめちゃったんだよなあ。 Bや他の子は、感覚ではわかるけれど、きつねが言った根拠が文章中から探せず困っていた。 他：わかる！えっと… C：Dさんが前に言っていたんだけど、きつねが言った言葉だから、えっと… 前に一人だけきつねだと主張したDの言葉を思い出している。 他：はい！ ※ほとんどの子どもが勢いよく挙手をした。 他：そうそう… やはり理由がはっきりとは説明できないようで、沈黙が流れる。 D：はい。なんでかと言うと、「いうなりきつねはとび出した」だから、言った後にきつねがとび出したって意味なんです。 きつねの気持ちを聞いたつもりだが、文章中の根拠を述べている。 E：ああ、きつねって後に書いてあるから、きつねがとび出したんだ。 他の子どもたちは、よく意味がわかっていない様子。 他：そういうことかー！ B：そうか！だからなのか！わかったわかった！ F：反対になってるってことか！ G：やっぱりきつねが飛び出したんだ！ H：ほうほう。「きつねは、いうなりとび出した」ね！ 納得して歓声が上がった。 I：「間違っているかもしれないんだけど…自分で自分のこと言

・そうだね。言う必要ないものねえ。 ・うんうん。「ほくもいるぞ！」ってね。 Gの言葉はまともでないが、一生懸命なので、とにかく言葉がでるまで待った。 ・そうだね。おおかみは大きいよね。 Gの発言に悪化されたEが、教科書をめくりながらすぐに説明を始めた。 ・ああ、ゆうかんだったんだね。 ・おびきよせたいんだね。 ・時間稼ぎしたかったんだ。 ・なんでだろうね。どうしたいのかな。 ・守りたかったからだよ。	っているのが、私は不思議だと思います。」 思ったことを話してくれた。Iはきつねの気持ちがまだわからない。 F：「おおかみに、『ほくもいるぞ!』って言っているんだよ。」 G：わかった!「ほくもいるぞ!」っていうのは、 「おおかみと戦うぞ!」って気持ちで…えっと… おおかみを怖がらせたかったんだけど、でも大きくて… 他の子も、応援するようにじっと聞いている。 でも、勇気をもって戦うぞって気持ちが、カッコいいと思います。 E：最後の場面に、「その上ゆうかんなきつねのためになみだをながした」って書いているんだけど、この部分のことで、本当にゆうかんだったんだと思います。 D：なんでその言葉を言ったかという、ひよことあひるとうさぎを守りたくて、おおかみをおびきよせようと思ったんじゃないかな。 G：うん。時間稼ぎだ! そうさうさう、と他の子も頷いてい る。Jの疑問で、「それは、・・・」 と更につぶやきが増した。 J：なんで? K：ひよことあひるとうさぎを守りたかったから。 E：なんで、守りたかったかと言うと、ひよことあひるとうさぎを大切に育てたからだよ。 I：ひよことあひるとうさぎは、優しい言葉をきつねに言ってたから、きつねは変わったんだよ。
私が多くを語らなくても、子どもたちで意見を出し合い、疑問を解決している姿が見られた。後半は特に子どもたちの発言で授業が進んでいた、全員が集中し、きつねが言った一言の謎を解こうとした姿勢は、文学の授業を心底楽しんでいるように見えた。(資料⑦、⑧) 私も、初めて文学の授業が心の底から楽しいと感じた。	
8 / 8	きつねに、自分の思ったことや伝えたいことを手紙に書く。
手紙を書く活動に意欲的に取り組んだ、きつねだけに書かせるつもりだったが、ひよこにも書きたいという声があったので、時間が余った子どもは自由に書いた。(資料⑨)	

第4章 成果と課題

成果

①音読に力を入れた結果

- ・わからないことがあれば、教科書をすぐにめくり、音読をする子どもが増えた。また、読む体力がつき、文に線を引く作業に集中して取り組むことができた。内容が理解できると読み方が変わっていった。内容理解に音読は必要不可欠である。
- ・文章の表現のおもしろさに気づくことができたのも成果である。きつねの喜びの表現がだんだん大きくなっていることや、「ひよこはまるまる太ってきたぜ。」は、語り手が言っていることを、子どもたちで発見できた。自分1人だけでなく、役割読み等を通して、様々な友だちの読みを聞いたことも刺激になったはずである。

②発見したことや、思ったことを話す楽しさを味わった結果

- ・「お手がみ」の実践の時より、子どもたちの言葉を待ったり、繰り返したりして、「聞いているよ」という姿勢を貫いた。子どもたちが活発に思ったことを言えるようになり、反対意見や疑問も言えるようになった。友だちの話をよく聞くようになったことも成果である。また、読み聞かせの後の感想の交流によって、「お手がみ」で一度も意見を言えなかった3人のうち2人が、挙手をして発言することができた。残りの1人も、指名されると抵抗なく自分の意見を言うことができた。

③自分の考えの根拠を明らかにした結果

- ・自分の考えの根拠を明らかにするために、文に線を引く手立てをとったところ、「～と書いてあるから、・・・だと思います。」と発表する子どもが増えた。これは「お手がみ」の実践ではほとんどなかったことである。また、きつねの気持ちを考える場面でも、文章表現に着目して答えを導き出していた。深い読み取りをしていくには重要な手法である。

課題

- ・音読に力を入れたつもりだが、この実践では、全体に向けて一人で読む活動がなかった。自分の読み取ったことを表現することは、大切な活動である。今後の授業では取り入れていきたい。
- ・文に線を引く活動を行ったが、全員が取り組んでいたのか、それを授業で全て発表できていたのか、個々の実態を把握するのが難しかった。線を引きすぎている子どもが3人、少なすぎる子どもが2人いた。他にも、当てはまらない部分に線を引いていた子どもがいたかもしれない。個別の声かけや、チェックが必要である。
- ・経験の浅い教員が、文学の授業が難しいと思う理由に、「子どもたちを話し合わせなければ」という焦りがある。この実践で学んだことは、教材研究をしっかりと行い、話し合うことで全体が見えてくる場面を探し出せば、全ての場面で語り合う必要はないということである。しかし、教材研究は1人では難しく、時間も十分にとれないのが課題である。教材研究の機会をどのように確保したらよいか考えていく必要がある。

資 料

お手がみの実践・・・P 1～5

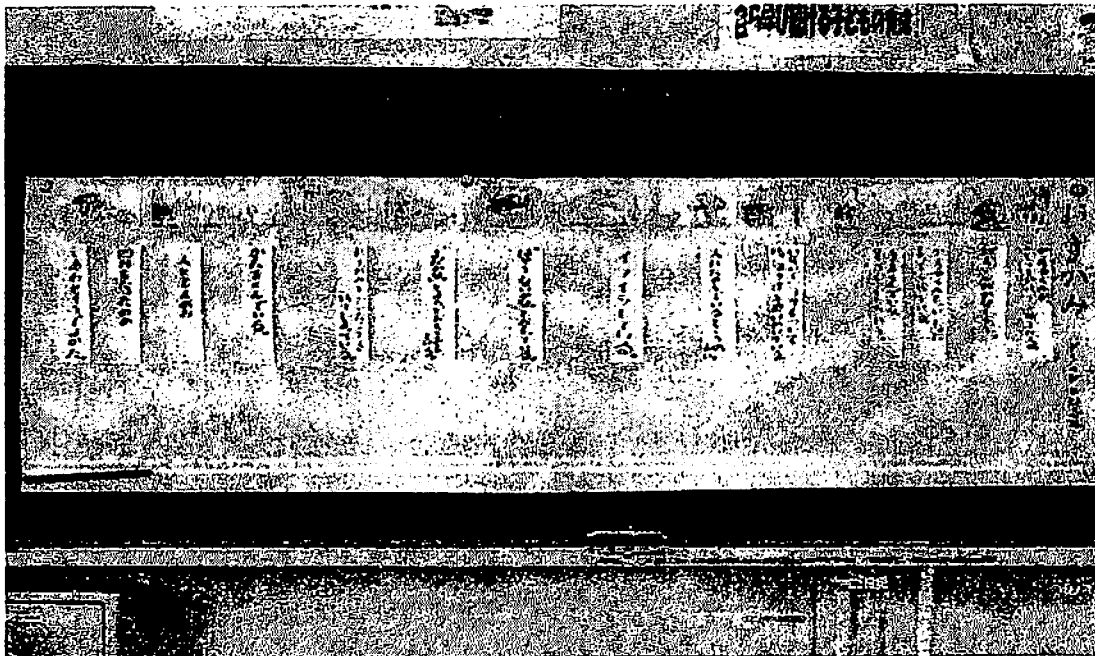
きつねのおきゃくさまの実践・・・P 6～12

日々の取り組み・・・P 13～16

実践の全体図・・・P 17

「お手がみ」 資料

資料① 子どもたちの感想



資料② なぜいい手がみなのか考えている場面

担任	子どもたち
・がまくんは、まだイライラしているのかな。 ・そうなんだね。他にありますか。 ・ああ、手がみを出してくれたこと自体が、もう嬉しかったんだね。 ・そうなんだね。手がみに何て書いてあったのかな。 ・ありがとう。かえる君はどんな気持ちになっただろうね。 ・どこからわかるかな。	A: 絵がにこっとしているし、「とてもいい手がみだ。」と言っているから、イライラしてないと思います。 B: 「だって、ぼくが、きみに手がみだしたんだもの。」ってかえる君が言ったときから、嬉しくてイライラしていません。 C: 「手がみに、なんてかいたの。」って聞いている時は、もう嬉しくなっていると思います。 全: 「しんあいなる…しんゆう、かえる。」 D: ちょっと安心した。 E: 「きみのしんゆう、かえる。」の後の、「ああ、」というと

・ここなんだ。みんな「ああ」ってどうやって読むのかな。 ・安心してんだ。 ・そうなんだ。みんなはいい手がみだと思う？ ・じゃあ、この手がみを書いて、いい手がみを味わってみようか。 ・この手がみの「いいな」って思うところを教えてください。 ・どうしてここがいいと思ったのかな。 ・ああ、「しんゆう」ね。「しんゆう」って何かな。 ・いいね。しんゆうって。 Iさんは、どこがいいと思いましたか。 ・「しんあいなる」ってどういう意味かな。 ・そうなんだね。他に好きなところはあるかな。 ・そこがいいと思ったんだね。どういうところが好きなのかな。 ・「きみの」かあ。 ・うんうん。そういうことか。	ころです。 数人：そうそう。 F：「ああ」 B：本当に安心してみたいだね。 C：「いい手紙だな」って思ってるね。 全：思う！ ※手がみをプリントに書き写した。 G：「ぼくは、きみが、ぼくのしんゆうであることをうれしくおもっています。」です。 G：「しんゆう」って書いてあるからです。 H：たぶん、友達とか、家の入じゃないんだけど… 家族みたいな人。 B：遠くに行っても友達ってこと。 I：「しんあいなる」です。 J：大好きなって意味かなあ。 他：おー！いいね。 B：大好きながまがえる君てことか。 k：「きみのしんゆうかえる」です。 L：親友になるから、「きみの」っていうのがいいと思います。 他：友だちってなるからね。
--	--

・「ああ」にはいろんな気持ちがつまっているんだね。	J：どうして「ああ」って言ったかというと、 大好きだったんだな、って思ったからじゃないかな。 他：ああそうか。 C：かえるくんが親友だと思ってくれたんだな、ってがま くんが思ったんだ。
----------------------------------	---

多くの子どもがつぶやいたり、発言した。自分たちなりの言葉で、「しんゆう」「しんあいなる」の意味や、がまくんの気持ちを考えていた。友だちの発言を聞いて発見がたくさんあったようで、拍手をする姿が見られた。

資料③ 子どもたちの手紙

かえるくんへ

きみはまえからずーとよもだ
りだ。たまがする、こんどよそで
いようぼくのいえでよそぼうね。



B
より

がまくんへ

がまくん、かなしいとき、はたのしいときお
もいだしたりずきなおとしたりを思い出
してけんきにしてね。で、たうあそんたりい
ろんなことおしやうね。がえるくん
がいてよかったね。



A
より

元気になる方法や、かえるくんの
大切さを、まるで自分の友達の一
ように教えてあげている。

前からずっと自分の友達だった気
がすると書いている。物語に入り
込んでいる様子がわかる。

かえるくんへ

かえるくんがまくんにやきいしくおし
わてくれてありがたう。かえるくんのたか
げでがまくんがイライラするのをやめま
す。これもかえるくんのたかげだよ。



資料 4

がまくんが不機嫌だった場面で、
かえる君が根気強く励ましてい
る場面が心に残っている様子。
がまくんのかわりにお礼を言っ
ている。

C
より

かえるくんへ



やさしいやさしいかえるくんがまくんや、
と手がみを大せつにとでおいでるとおもいます。
またかたつむりであたらおてかみをあげてね。
かえるくんはまかせるようにあよろしくね。

E
より

かえるくんへ



かえるくん、あたしはおまがみを
おまがみをかえるくんがつくった
おまがみをかえるくんが
あけるところかすておます。
わたしはかえるくんがやさしい
とはおもいますせんでしにんすすす。

D
より

かえる君の優しさが大好きな様子。
「かえる君に届くかなあ」と言いな
がら書いていた。

がまくんの立場になって、かえる
君の優しさを褒めている。

かたつむりくんへ



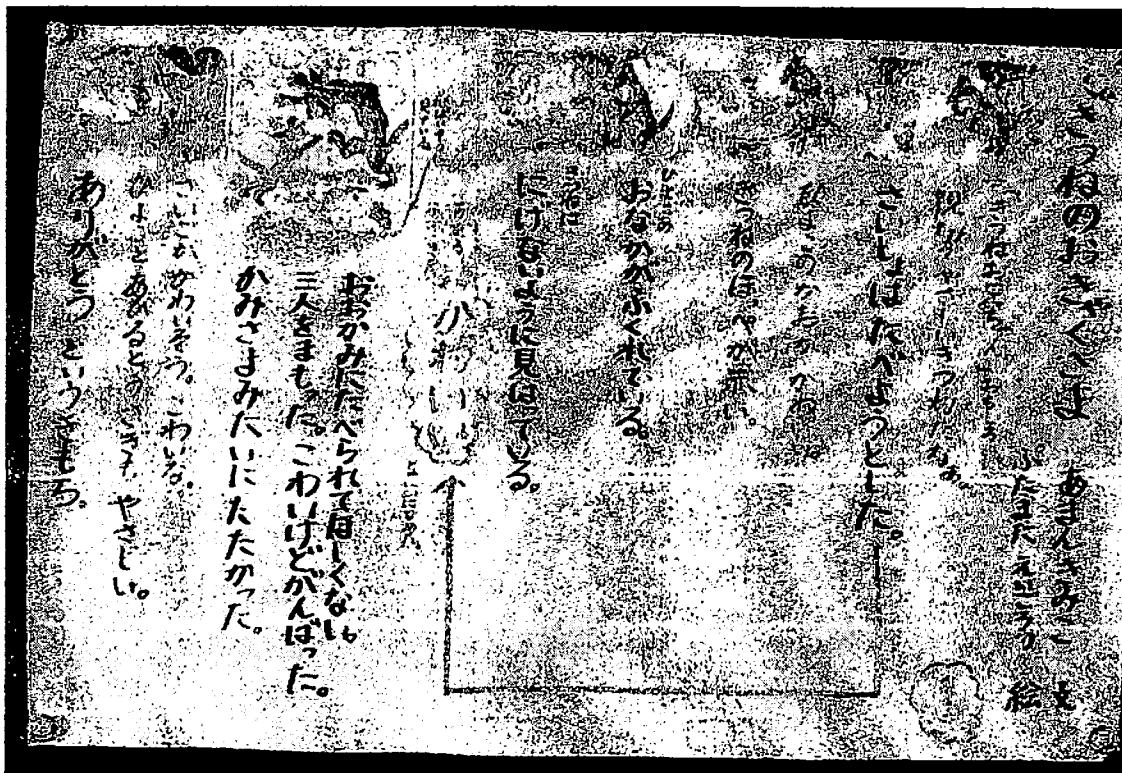
かまくんのいえまで 四日もたつた
けど、かたつむりくんは
やさしいね。あたしはかたつむ
りくんのしんゆうだよ。

F
より

四日もかかったことを労っている。
学習した「しんゆう」という言葉を
使って、かたつむり君に手紙を書い
ている。

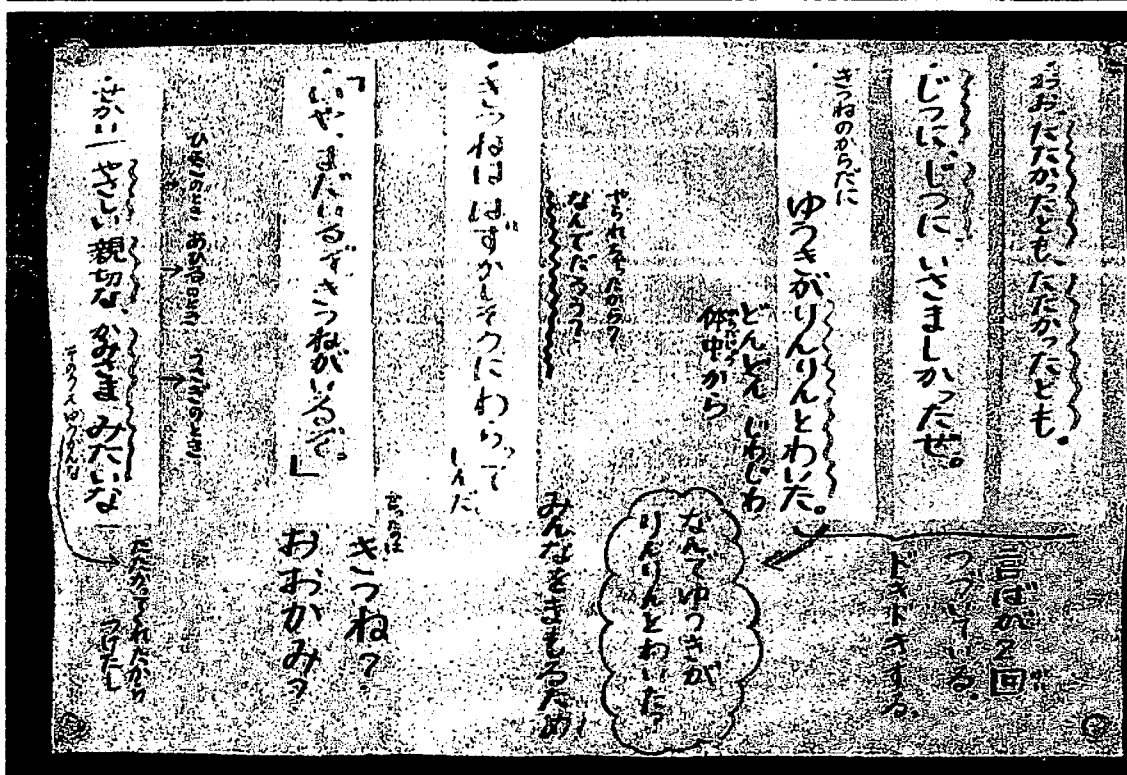
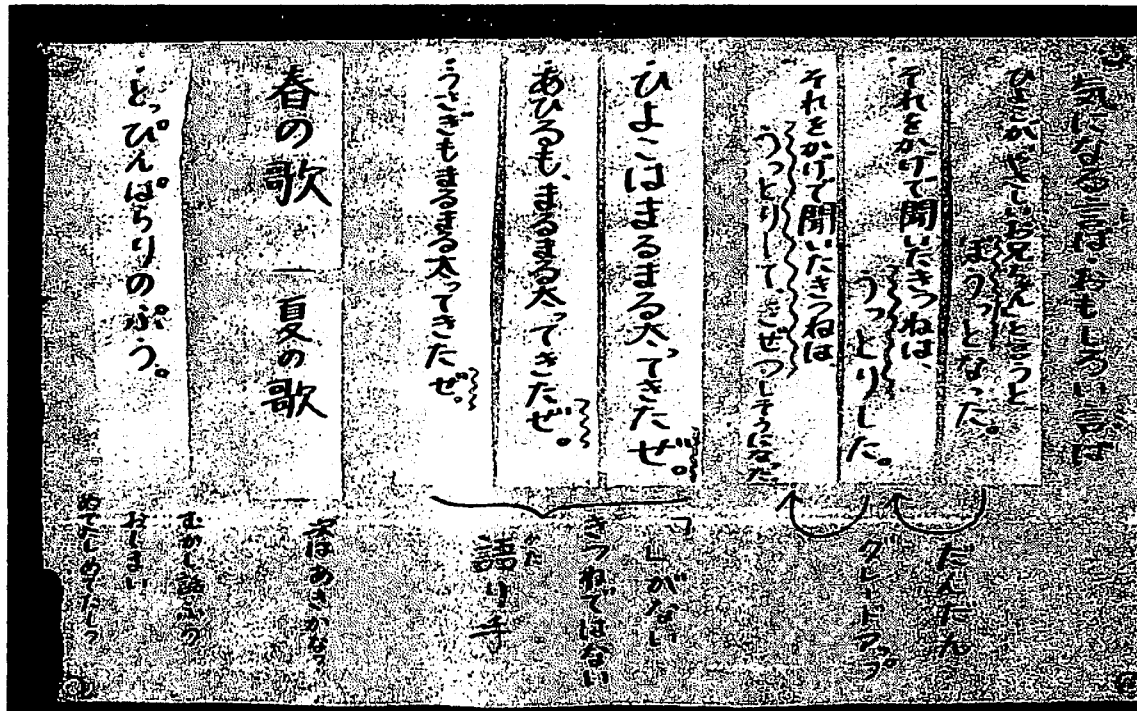
「きつねのおきやくさま」 資料

資料④ 子どもたちの感想



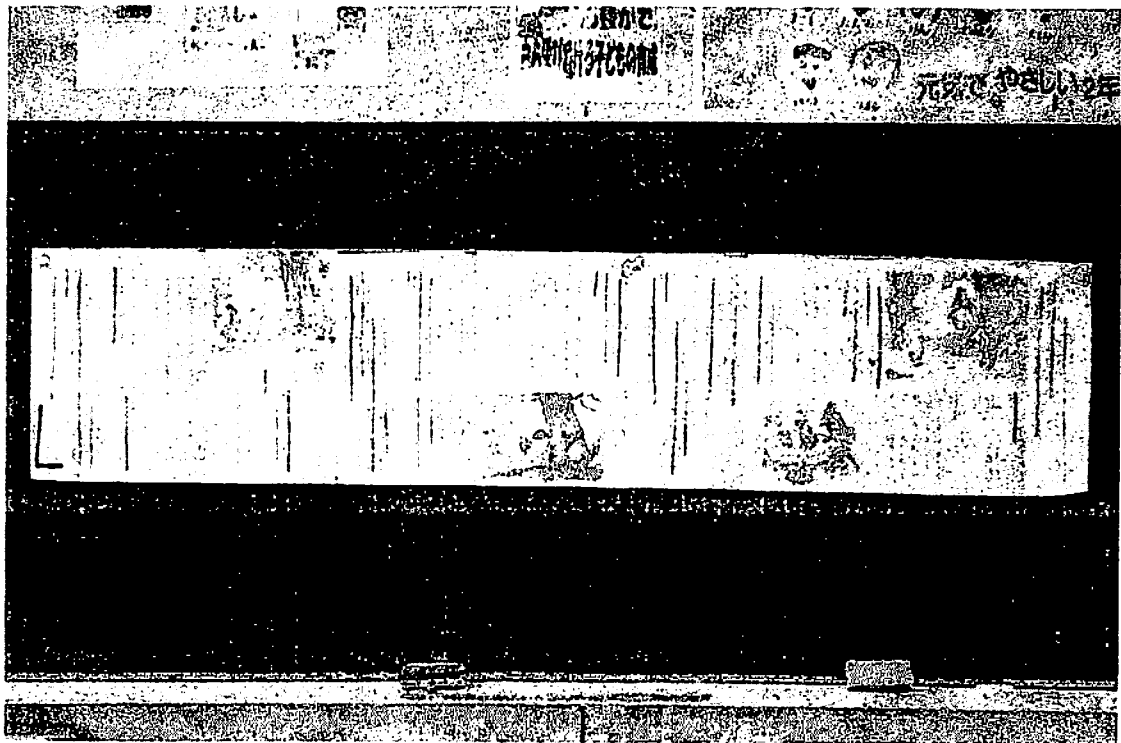
1年生の時より、2年生の方が感想の量（人数）や質に変化が見られる。子どもたちの思ったことがたくさん発表された。挿絵にも注目していることがわかる。

資料⑥ 気になる言葉、おもしろい言葉

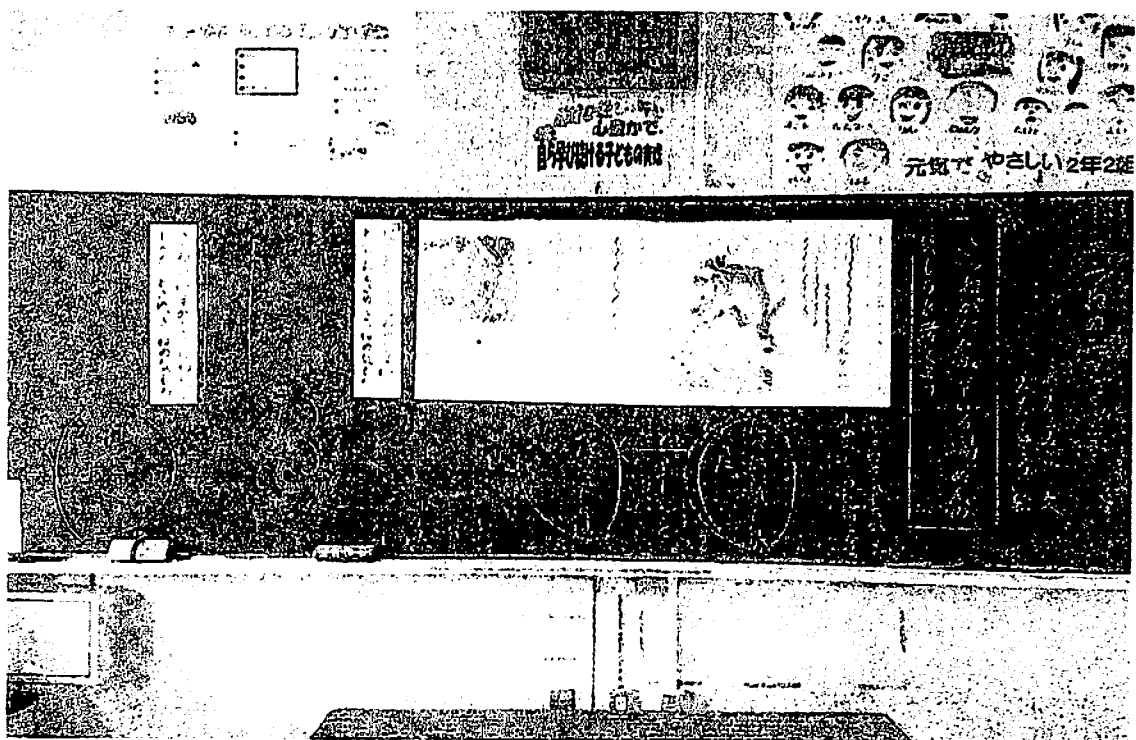


文に線を引く作業を通して、内容だけでなく表現にも注目することができた。
また、言葉が2回続いている、読んでいてドキドキするといった意見があり、音読の効果も感じた。

資料⑥ まきものできつねの気持ちの変化を読み取った。



資料⑦ 最後の場面のきつねの気持ちを考えた。



資料⑧ 「きつねははずかしそうに笑ってしんだ」理由を考えている場面

「きつねははずかしそうにわらってしんだ」理由がなかなか出ず、音読をしてもう一度きつねの気持ちを考えようという流れになった。

担任	子どもたち
・音読をして、きつねの気持ちはわかりましたか。 ・さっき言ってくれたね。がんばってくれたんだよね。この時は食べようという気持ちはあったのかな。 ・ないよね。では、はじめはどうだったの。 はじめとおわりのきつねの気持ちの変化をしっかりとらえさせたい。 ・そうだね。繰り返していたね。では、ふつうのきつねだったら、どっちの気持ちが普通なのかな。 ・そうだよね。それが当たり前だね。 ひよこ達を守りたい気持ちは、ふつうのきつねならば変であることをわからせたい。 ・だんだん優しくなっちゃったんだよね。きつねとしてそれはどうなの。 ・変だよねえ。 ・そうだね。では、きつねは、自分で自分が変だって思っているのかな。	A：わかりました！時間稼ぎをしようとして、それで、うーん。 全：ない！ 他の子どもたちも「そうそう」と似た事をつぶやいている。 全：はじめは食べようとしてた！ B：そう。それで、あったり、なくなったり、あったり、なくなったり、繰り返していた。 Bさんはいつも発表をたくさんしないので、積極的に書いた。 全：食べたい気持ち！ C：うん。悪いきつねがふつうだよ。 B：でも、優しい言葉を言われちゃったから、優しくなっちゃって、それで、それで… 全員が前のめりで答えていた。 全：変だよ！おかしいー！ D：でも、優しい言葉を言われて変わったんだよ。 E：言われなかったらそのままだったよ。 B：自分で、自分がおかしいって思ったよ！「なんでみんなを守ったんだ」って！

・うんうん。「なんでみんなを守ったんだ」ってね。なんでだっけ。 どうして守りたかったのか、子どもたちの考えを深めたい。 ・そうだね。いつのまにか大事になっちゃったんだよね。それは変だよ。死ぬ時に気付いたんだよね。 ・こういう気持ちって、はじめの方でJさんが言ってくれた、「自分が情けないな」ってやつに似てるよね。 自分がバカだったなというきつねの気持ちに気付いてほしい。 ・では、「はずかしそうにわらってしんだ」の「わらった」は、誰に対して笑っているのかな。 これがわかれば、きつねの気持ちを理解していると言えるだろう。 ・おおかみかな。	A：えさだから？ G：えさじゃないよ！もうえさじゃない。 H：大事だから守ったんだよ。 「そうそう」「確かに」というつぶやきが多く聞こえた。私から目をそらさず一生懸命きつねの気持ちを考えている。 数人：うんうん。 数人：あー……！ (Jさんは音読をする前、「きつねがわらってしんだのは戦いに負けたからだ」「自分が情けない、と思ったんだろう」と発言していた。) 「違う違う！」「じゃあ誰？」 「えーひよこ？」「ひよこも違うよ」というような話合いが聞こえてきた。 J：わかった！自分だ！ k：最初は食べようとしていたのに、最後は守っちゃって、自分何してるんだろうって気持ちだ。
---	---

自分たちできつねの気持ちに気付いて欲しい気持ちと、どうしたらわかるだろうか、という葛藤で、教師の発問は遠回りなものが多かった。それが反省点である。しかし、全員が生懸命きつねの気持ちを考えている姿が成果だった。

きつねさんへ
 きつねさんは、たすけたとき、なんでもそれはいいことだと思えます。ひよこさんもあひるさんもうきつねさんもよくよろこんでいました。せかいに一人だけのやさしいきつねさんですよ。

G

より

きつねの気持ちを考えて「いいことだ」と励ましている。ひよこたちの気持ちも伝えている。

きつねお兄ちゃんへ
 きつねお兄ちゃんはおおきみとたかうとまかんばってひよことあひるとうへんをまもりました。ほんとうにやさしい親もなかみてるみたいなのうえゆつかんなきつねです。これから、見刃にして下さーいね。親七にして下さーいね。

H

より

教科書の言葉を引用して、ひよこたちを守ったきつねの行動をたたえている。

きつねさんへ
 きつねさんのゆうかんはところがすくつかつこよかつたです。しかもいぶんでかかくいと言っ気もちがたいすきです。わたしはがばじめに見たとおけたべようと言っ気もちがあてんとんかあつていたのがなんでもうっと思えます。

I

より

「じぶんでかかってこいという気持ち」と書き、飛びだしたきつねの気持ちを理解している。

うさぎさんへ
きつねくんがしんじゅったときうさぎ
さんとひよこをあひるさん
たちはとてもやさしいです
ね。きつねくんはとても
切な人だんだんですね。

K
より

うさぎの気持ちに寄り添って手紙を書いている。きつねの親切さにも触れている。

ひよこに感謝を伝えている。様々な角度から登場人物の気持ちを考えている。

きつねお兄ちゃんへ
「ペー、ジ」 たたかた、と云が、「一よか、たよ。
三人をまもつて、せかい一心のやさしいきつ
ねだね。」
「はい、ごしんじゅう、たけど、三人かんしゃい
てたよ。」

丁
より

死んでしまったけど、ひよこたちが感謝していたことを伝えようとしている。

ひよこちゃんへ
おーおのニをほかのどろろつにも
おーお兄ちゃんのニをわるいさうお
いはいーつたえーくわーきりかど
おーいまして。おーお兄ちゃんもよろこ
びます。

より

日々の取り組み

音読の様子(2年)



読み聞かせのお花



感想の交流をしなかった本の中で、子どもたちが思ったことを言いたがったものを選び、感想を書けるようにした。

読み聞かせをした本(2年生～)

図書室で見つけたもの、子どもが家から持ってきたもの、「安房この本だいすきの会」から発行されている「おすすめの絵本・物語」を参考にしたものなど、様々な本を選んで読み聞かせをした。

冊数	著名	作者名	出版社
1	おこだでませんように	くすのきしげのり	小学館
反応	「なんかわかるな…」というつぶやきが聞こえた。		
2	どんぐりむらのパンやさん	なかや みわ	学研
	かわいいさし絵に、女の子は喜んでた。		
3	もっちゃん もっちゃん もうもっちゃん	土屋 富士夫	徳間書店
	ハラハラドキドキで話を聞いていた。		
4	注文の多い料理店	宮沢 賢治	偕成社
	「こわいよー！」と隣同士で方を寄せ合っていた。		
5	なまえはななに？	かさい まり	アリス館
☆	「ぶぎゅっ」という赤ちゃんの聲がかわいいと評判。		
6	パンダ銭湯	tupera tupera	絵本館
	「えー！」パンダの正体にみんなびっくり。		
7	まよなかのたんじょうかい	西本 鶏介	鈴木出版
☆	似たような経験をした子どもがいる様子。「でもお母さんはえらい。」というつぶやきがあった。		
8	トントントンをまちましょう	あまん きみこ	ひさかたチャイルド
☆	お花の妖精に大興奮。甘酒を知る機会になった。		
9	おいしいのぼうけん	古田 足日	童心社
	手に汗をにぎりながら、ドキドキした顔で聞いていた。		
10	さるのせんせいとへびのかんごふさん	穂高 順也	ビリケン出版
	かんごふさんの治療方法にみんな驚き。		
11	ねずみのよめいり	いわさき きょうこ	教育画劇
	「ねずみ同士でお似合いだよ」と結末に喜んでた。		
12	びゅんびゅんごまがまわったら	宮川 ひろ	童心社
	校長先生との戦いが面白かった様子。		
13	こんとあき	林 明子	福音館書店
	こんのことが心配で、だまって最後まで聞いていた。		
14	いいから いいから	長谷川 義史	絵本館
	独特のさし絵と、繰り返される「いいから いいから」が面白かった様子。		

15	ぐるんぱのようちえん	西内 ミナミ	福音館書店
☆	「昔にもどりたくなったな」と過去を懐かしんでいた。		
16	おしゃべりなたまごやき	寺村 輝夫	福音館書店
	文章が多く、軽快な読み方が大切。練習をおすすめ。子どもたちはずっと笑っていた。		
17	てぶくろ	ウクライナ民話	福音館書店
	森の仲間たちのかわいい行動に癒やされていた様子。		
18	けんけんとびのけんちゃん	角野 栄子	あかね書房
	けんちゃんの意外なお仕事の様子に、「何が役に立つかわからいね」というつぶやきがあった。		
19	つきよのくじら	戸田 和代	鈴木出版
☆	たくさんの発見と、感動があった様子。さし絵の美しさ。細やかさに大人も楽しめる。		
20	キャベツくんとぶたやまさん	長 新太	文研出版
	題名を読んだ瞬間からにこにこ笑っていた。最後のおちにはみんな心配していた様子。		
21	オツベルとぞう	宮沢 賢治	三起商行
	難しいよ、と言ったが、難しくていいから読んで欲しいというリクエストだった。私が解説しながら読んだ。いねこき機会の「のんのんのん」が気に入った様子だった。		
22	ふしぎなともだち	たじま ゆきひこ	みつばち文庫
☆	「なくなったものたくさんあるな…」としみじみ自分の行動を振り返っていた。		
23	ねずみくんのチョッキ	なかえ よしを	ポプラ社
	最初から最後まで楽しくてにこにこ。気に入って他のシリーズも読破した子どもも多くいた。		
24	むしばいっかのおひっこし	にしもと やすこ	講談社
☆	「むしばいっかにも色々あるんだな」と関心している様子。むし歯になりたくないね、と隣同士で話してした。		
25	かさちゃんです	とよた かずひこ	童心社
	色とりどりのかさがかわいいと大喜び。にこにこしながら話を聞いていた。		

☆マークは、感想の交流をしたもの。

読み聞かせ後の感想

「つきよのくじら」読み聞かせ後の、子どもたちの主な反応

- ①冒険をして、強くなっていったのがよかった。3人
- ②お父さんに会えてよかった。
- ③お父さんは死んじゃったのか気になる。
- ④絵がかわいい。3人
- ⑤敵に襲われたとき、ハートマークが飛んでいってしまったよ。
- ⑥ハートマークって体力なのかな。
- ⑦お母さんの体にもハートマークがあったから、お母さんの力だと思う。
- ⑧くじらにふろしきっておもしろい。
- ⑧色々な動物の絵が描いてあって、見るのが楽しかった。3人
- ⑨お父さんと潮を吹いていたところがよかった。2人
- ⑩潮は月まで届いたのかな。
- ⑪お父さんと夜に潮を吹いたから「つきよのくじら」なのかな。
- ⑫おもしろかった。

思ったことを何でも言ってよい、全員言ってみようという目標で始めた。最初はなかなか全員言えなかったが、取り組みの回数を重ね、発表できる人数が増えていった。子どもたちの話を聞いていると、挿絵をよく見ていることがよくわかった。2回、3回と挙手し、発表を楽しんでいる子どももいた。

実践の全体図

広く深く豊かな文学教育をめざして
～子どもたちと作品のおもしろさを見つけていく文学の授業の実践(1・2年生)～

私と文学教育

教師1年目の私の挑戦

- 広く深く豊かな文学教育ってなんだろう。
- 私が受けてきた文学の授業…心が耕され、癒されていた。
- 作品のおもしろさに気づき、人の気持ちを深く考え、いろいろな感情を知った。
- 文学作品の読みの授業をつくる。

方法ありきではないことは十分わかっている上で、
あえて、文学の授業の手法を若い仲間提案したい。

- そして、2年目につなぐ。リベンジの2年目
- 1年目の実践で感じた手応えと力不足。
 - 実践の継続により成果を確かなものとする。
 - 深い教材研究と授業実践で子どもの力を伸ばす。

安居の文学教育で確認してきたことの中から

- 読み聞かせの有効性
特に入門期における読み聞かせの継続
- 子どもたちの実態に合わせた教材の自主編成と教材研究
よい作品に出合わせ、読む活動を大切に、読み味わわせることにより、作品の世界を共有共感しながら世界を広げる
- 言葉を大切に読む
- 教師の問い…大きな問いから深めるための切り返しの問いへ
- 子ども同士で発言をつなぎながら、読みを深める
- 低学年における「広く深く豊かに読む」とは
登場人物に同化しながら、作品の様子が見えるように、聞こえるように、伝わるように読んでいく。
登場人物の顔を想像し、自分があたかもそこにいるような気持ちで読む

私の実践 ～広くいろいろなことをやっていく中で 子どもを育てる～

～こんな子どもたちをめざして～

～文学教育のめざすもの～

子どもたち一人一人が、自分の読みを自分の言葉で表現し、それを共有することで、ものの見方・考え方を広げたり深めたりできるようにしたい。

- ①人や社会を見る目を育てる。(感性的人間認識) *人や社会を多面的に見る目 *人を思いやる心
- ②豊かな感情を育てる。 *喜怒哀楽を感じる力
- ③文学を内容と表現・構成の両面から捉え、そのうちを多面的に捉える力をつける。
- ④言葉・文章への感覚を育てるとともに、語彙を増やす。
- ⑤読み聞かせや授業を通して、読書への関心や意欲を高める。

授業の中で子どもを育てる

「きつねのおきやくさま」(あまん みみこ/作)～

作品の魅力

- ①きつねの気持ちの変化
- ②文章表現 言葉
- ③「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」
- ④「きつねは、はずかしそうにわらってんだ。」
- ⑤文章・言葉とびったり合っている挿絵
- ⑥昔話風の始まりと終わり

2年生になった子どもたち

- 本に興味関心をもち、「すき間読書」を楽しめる子が多い。
- 音読への取組に意欲的である。
- ☆深い読み取りのできる子は、一部に限られている。
- ☆個性や学力差がより明確にあらわれ始めた。
- 読みがたどたどしい子3名 発表への抵抗がある子3名
- 音読は内容理解の一助となっているが、それだけでは深い読みに至らない。教材研究をもとに、文章や言葉に注目させる手立てをとっていきたい。

「お手紙」(アーノルド・ローベル/作 三木 卓/訳)～

作品の魅力

- ①ストーリー展開 個性豊かな登場人物
登場人物の変容(行動＝心情)
- ②ゆったりとした時の流れ
緊張感とスピード感のある場面は短い文
- ③二人の会話のテンポ
- ④挿絵の微妙な変化 短い文

目の前の子どもたち(男子8名 女子12名 20名)

- 元気で人なつこい。自由に自分の思いを話せる雰囲気がある。
- ☆時と前で話すことに緊張がある子が少なくない。
- 何にでも意欲的に、楽しくとりくめる子が多い。
- 音読「ゆっくり はっきり 大きな声で」を意識してきた。
- 1年間のまとめのこの時期、身につけてきた力を生かして、物語を感覚的に読むのではなく、一歩踏み込んで読めるようにしたい。

作品を授業でどう読ませっていくか(1年生の時の実践にプラスして)

(1)音読に力を入れる。

- ◇授業が始まる直前には、各自で音読を始めることにより、学習に対する備えをつくる。(心と頭のウォーミングアップ)
- ◇わからないことがあったら音読をさせることで、文章に立ち返る姿勢をつくる。
- (2)発見したことや思ったことを話す楽しさを味わわせる。
- ◇自分の意見を受け止めてもらえる安心感を与えるために、子どもたちのつぶやきや発言に耳を傾け、取り上げる。
- ◇全員が(発音に抵抗のある子も)発言できるように、全体の前で発言する経験を積み重ねる。*日々の授業や読み聞かせの後(週に1回程度)などに

(3)自分の考えの根拠を明らかにさせる。

- ◇作品全体を読んでいけるような主発問をし、それについて、根拠を明らかにさせながら考えるように促す。
- ◇自分の考えの根拠となる文や言葉にサイドラインを引かせることで、文や言葉に注目しながら読んでいけるようにする。また、作品の内容だけでなく文章表現の特徴などにも気づかせる。
- ◇子どもたちが発表に合わせ、全文を拡大したものに色分けをしながらいサイドラインを引きながら、一人一人の意見を目に見える形でまとめていくことで、読みを共有する。

作品を授業でどう読ませっていくか *学ぶ意欲を授業の柱にする

(1)音読に力を入れる。＝作品を体の中に入れる

- ◇読み合う前に、たくさん音読を取り入れることで、どの子も大体の内容を捉えられるようにする。
- ◇さまざまな方法を工夫しながら音読を取り入れることで、読みへの意欲をもたせる。
- ◇読み合う学習において、その目的に合わせた音読を取り入れることで、読みを深めることができるようにする。
- EX.一文読み＝P124のスピード感 役割読み＝心情
- ◇最後に音読の場を設定して、学習のまとめとする。

(2)発見したことや思ったことを話す楽しさを味わわせる。

- ◇作品との出合いの段階で、一人一人の思いを自由に語らせる。感動を素直に語らせることで、作品の世界を楽しむ雰囲気をつくる。
- ◇子どもたちの発見や思いをしっかりと聴き、認めていくことで、何を言ってもよい安心感をもたせる。

(3)挿絵の活用をする。

- ◇挿絵の並び替えをしながら語らせることで、大体のあらすじを捉えさせる。
- ◇「がまぐん」と「かえるくん」の表情や行動を確認することにより、心情理解の一助とする。

日々の積み重ねの中で子どもを育てる

読み聞かせの原則では感想を求めないが、作品や子どもの様子によって感想を出し合う。

☆読み聞かせ

【よさ・ねうち】一人が読むことが難しい子も、全員が同じように作品の中に身を置いて、作品世界を楽しむことができる。みんなで同じ時間に同じ世界を共有できる。

【方法】読書の時間・国語の時間・傍りの会などに、教室の前の方に集まって聞く。教師の選書だが、子どもからのリクエストにも応じる。

☆感じたこと・思ったことの自由な出し合い *週1回程度

【よさ・ねうち】感動をみんなで共有し、作品のよさを実感することができ、認め合い・学び合いの場ができる。

【方法】言いたいことがある子から、自由に語らせる。負担にならない程度に、全員の発言を待つ。どの考えも否定せずに受け止める。

☆音読 教科書の持ち方・立ち方・「おおきく、ゆっくり、はっきり」、全員音読のよいところを具体的にほめることで自信をもたせる。